

# 音読・暗唱指導

—意味と音声の結び付きを強める効果的な方法—

高知県立高知東高等学校 教諭 三浦 理々

## 1 はじめに

英語教育においてコミュニケーション能力の育成が重視され、教育現場では生徒に言語使用の場面を多く与えられるよう、タスク活動など様々な活動が行われている。しかし、その一方で基礎学力が定着していない、学習意欲の低い生徒も多く、せつかくのコミュニケーション活動もその場限りの活動で終わってしまうことが多い。そんな現状を打開するために、言語材料の内在化を目指す活動として音読・暗唱に注目した。初級学習者にとって音声を伴う反復学習はとても大切である(竹内, 2000)。学習者の熟達度に関係なく始められ、インプットとアウトプット両方の側面をもつ音読は、基礎基本を身に付けるためだけでなく、スピーキングなど発展的な活動になり得る大きな効果が期待される活動である。

## 2 研究目的

音読・暗唱の効果は経験的に実証され、授業でも伝統的に取り入れられているが、授業でおこなう音読・暗唱と言語習得のために自主的に行われる音読・暗唱には隔たりがあるように思われる。そこで、主に授業活動として実践可能な音読の指導法を意味と音声を結びつけるという観点から考察する。特に、本研究ではチャンクで区切った音読の有効性を実証するとともに、英語の熟達度とチャンクの大きさの関係を明らかにし、音読・暗唱の効果的な指導方法を提案することを目的とする。

## 3 研究内容

### (1) 用語の定義

#### ア 音読の定義

音読とは、書かれたものを、発音、強勢、イントネーション、区切りなどに注意しながら聞き手に分かるように読むことをいう(土屋&広野, 2000)。音読する前に十分な口頭練習が行われ、意味がわかり、かつ言えるようになっていることが前提である。

#### イ 暗唱の定義

暗唱とは、文の内容をよく理解し、それを記憶にとどめ、その上で正しい発音・抑揚で聞き手に自分のものとして伝える活動である(語学教育研究所, 1998)。暗唱は音読と関係していて、十分な音読が暗唱の前提である。

#### ウ チャンク

チャンクとは、もともと人が一度に処理できる情報の単位という意味で使われるようになった言葉であるが、英語教育におけるチャンクとは一般的に句や節などの意味のかたまりを表す語として使われている。本研究においても、一般的な意味合いで使用する。

### (2) タスクを課した音読に関する先行研究

音読に関する実証的な研究が近年増えてきたが、それらの研究内容、研究方法、対象者、実施期間などは様々で、必ずしも一般化できるものばかりではない。そこで、本研究では特に意味と音声の結び付きを意識させる音読についての研究を取り上げ、そこから見えてくる音読のポイントを整理する。

#### ア 介入音読

学習者が音読している最中に、指導者が内容に関するコメントをはさみながら音読を進めていく。音読終了後の要約テストにおいて、通常の音読をしたグループよりも高得点であった（小山，松畑，田邊，1998）。

#### イ 間違い探し音読

学習者に、既習のテキストを部分的に変えたテキストを音読させ、元のテキストと変わっているところを見つけさせる。変更点を探すことに注意が向けられるあまり、音読スピードが落ちる場合があると報告されている（戸田，2008）。

#### ウ 空所補充音読

既習のテキストを部分的に空所にしたテキストを、空所に語を補いながら音読する。内容語の一部を空所にしたテキスト、機能語の一部を空所にしたテキスト、ランダムに空所にしたテキストなど、異なる空所を施したテキストを繰り返し音読した後で、テキストを見ないで英文を再生する時、そのままのテキストを音読する場合よりも再生率が高かった（Yonekawa，2008）。

以上の音読はいずれも意味を意識しながら音読するには効果的な方法で、ただ何気なく音読していると陥ることのある空読みを防ぐことができる。流暢に音読していても後で内容を尋ねるとまったく頭に残っていないということがある。音声化は一度英語のリズムやイントネーションに乗ってしまえば、意味を理解していなくても英語らしい読みができることがある（天満，1989）ので、いかに意味を意識しながら音読させるかが言語材料の内在化にとって重要である。

### (3) チャンクおよびチャンクによる音読についての文献研究

Schmitt & Carter (2004) は、全体的な単位として貯蔵されているチャンクを Formulaic sequences と呼び、単語の連鎖よりも全体的なかたまりとしての Formulaic sequences の方が処理速度が速いと述べている。この Formulaic sequences の貯蔵が少ないと、テキストを再生する場合、一語一語再生することになり、結果的に誤りが増えると指摘している。Ellis (1996) は、言語学習のいかなる段階においても連続の習得が重要であると述べている。例えば、談話の学習は、語彙単位の連続、つまり句や連語の連続に関連している。そこで、ネイティブスピーカーのように話せるようになるためには、しばしば使用される馴染みのある連語を数多く内在化することが大切である。

チャンクの大きさやチャンクの区切り方は、学習者の読解力、テキストの難易度、読む速さ、背景知識などによって変化する（土方，2004）。門田（2006）が、高校生と短大生を対象に行った実験によると、高校生は句ごとにスラッシュを入れた文の内容理解度が、単語ごとにスラッシュを入れた文や全くスラッシュを入れない文の内容理解度よりも高くなった。一方短大生においては、句ごとにスラッシュを入れた文と全くスラッシュを入れない文において同程度、単語ごとにスラッシュを入れた文よりも内容理解度が高くなった。このことから、熟達度の高い学習者の方がより大きいチャンクにも対応できることを示唆していると言える。柳瀬（2008）は、チャンクの区切り方に関するストラテジーを指導することにより学習者の読解力を高めた。

土屋（2004）は、音読の第一段階を学習者にチャンクを意識させることだとし、前から順番にチャンクごとの意味を理解していかなければ、読みながらテキストを理解することは不可能であると述べている。また、田中（1997）は、日常会話の構造をチャンクの連鎖であるとし、文がチャンクを作るのではなく、チャンクの積み重ねが文を作るのだと強調している。

### (4) 記憶と再生についての文献研究

言語学習は記憶と密接に関わっているが、記憶は大きく長期記憶と短期記憶に分けられる。中でも動的な短期記憶であるワーキングメモリの働きが、情報処理と保持において重要な役割を果たしている。情報はリハーサルによりワーキングメモリに一時的に保持される。ワーキングメモリの容量には個人差があり、リーディングスパンテストによって、読みの過程におけるワーキングメモリの個人差を測ることができる。それによると文を音読しながら、同時に指定された情報を保持していくという2つの課題を処理していく場合、文を読み進めていくに従って、保持すべき情報が増えて

くるため、新しい情報を保持できなくなってくる。これには、限られた認知資源を情報の処理と保持の2つに振り分けて使うこと (Trade-off) が関与しており、認知資源をあまり必要としない読みの自動化を実現することにより、認知資源を情報の保持に当てることが可能になる。

#### (5) 音声

音読における音声指導についてはあまり議論されていない。その理由の一つは文字と音を結ぶ音声練習は、音読以前にしておくべきことであるという考えがあるからだと考えられる(羽鳥、1968)。一方、コミュニケーションに重点を置いた指導法が強調される中、そうした分節レベルでの発音練習は敬遠されがちで、文脈の中でのリズムやストレス、イントネーションに指導の重点が移行してきている (Celce-Murcia, Brinton, Goodwin, 1996)。Wells (2006) はイントネーションは第二言語話者であっても誤りが許されないほど重要であるにもかかわらず軽視されていると問題提起している。

#### (6) 調査

##### ア 目的

音読する際の効果的なチャンクの大きさと、学習者の英語熟達度とチャンクの大きさの関係を調べることを目的とする。

##### イ リサーチクエスチョン

1. 音読時のチャンクの大きさが、テキストの再生に影響するであろうか。
2. チャンクによる音読の効果は、学習者の熟達度によって異なるであろうか。

##### ウ 方法

被験者：大学生 41 名、高校生 7 名、計 48 名の被験者に英語力テスト (英検 2 級の問題、50 点満点) を課し、上位群 9 名 (平均点 35.44) と下位群 9 名 (平均点 11.67) を抽出する。

材料：大きさの異なるチャンクで改行したテキスト 2 種類。カード A は節レベル (5~6 語) のチャンクで区切ったテキスト、カード B は句レベル (3~4 語) のチャンクで区切ったテキスト。カードは A、B ともに同レベルのものであると確認した (Fleshch-Kincaid Grade Level 9)。語数はカード A が 53 語、カード B が 50 語。

手順：1. 各自カードの英語と日本語を黙読し、内容確認する。  
2. モデルの音声を聞く。  
3. モデルの後について、テキストをチャンクごとに音読する。  
4. 各自テキストを 4 回通して音読する。  
5. 4 回目の音読が終わったら用紙を裏返し、日本語訳だけをたよりに音読練習した文を口頭で再生する。音読はすべて録音する。

採点：再生できた語数の割合を全体の語数から算出する。ただし、複数形の s(es) や動詞につく (三単現) s(es) については対象外とした。被験者の中には音読の練習の段階からこれらの s(es) を落としている者もいたため、練習の成果を測る妨げになると判断し、再生されていないとしても誤りとしなかった。

#### (7) 結果

##### ア 分散分析による結果

##### (ア) リサーチクエスチョン 1 について

カード B の方がカード A に比べ有意に再生率が高かった ( $p < 0.01$ ) ことから (図 1)、チャンクの大きさがテキストの音読・再生に影響すると言える。

##### (イ) リサーチクエスチョン 2 について

カード A およびカード B の再生率について、カードの種類 (被験者内) × 英語力 (被験者間) の 2 要因混合計画の分散分析を行った。その結果、交互作用 ( $F(1, 16) = 5.276, p < 0.05$ )

は有意であった。図1に示す通り、カード別の再生率を比較したとき、上位群よりも下位群の変化が大きく、よって、チャンクの大きさは、英語の熟達度が低い学習者に対してより影響力が大きいと言える。

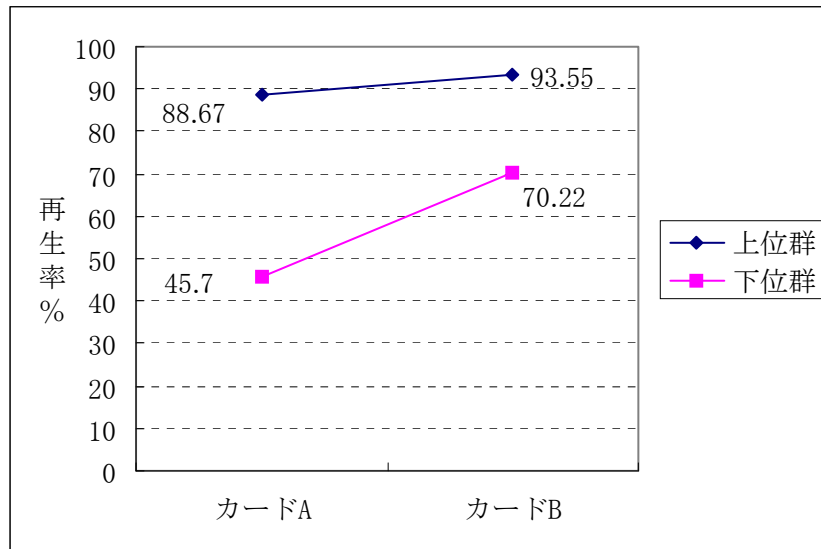


図1 テキストの再生率

#### イ 質的分析

各カードの再生誤りを表1、表2に示す。再生できなかった部分や、誤って再生された語などを見ていくと次のような傾向がある。

##### (ア) 両群に共通する再生誤り

両群に共通する誤りで特に多かったのは関係代名詞を含むチャンクとSVOC文型のチャンクにおいてであった。また、受動態や進行形を含むチャンクにも誤りが見られた。統語的に馴染みのない表現や日本語と英語が一致していない表現については再生が難しいことがうかがえる。

##### (イ) 上位群の再生誤りの特徴

上位群では前置詞や接続詞などの機能語の脱語や意味に大きく影響を及ぼさない語の置換が見られた。

##### (ウ) 下位群の再生誤りの特徴

下位群の特徴としては一度再生できなくなると、その後の部分もかたまりになって抜け落ちてしまい、テキストの後半部分においてその傾向は最も顕著であった。

#### (8) 考察

上位群は、テキストの音声化が容易にでき、統語知識もあるため、チャンクの大きさにかかわらずテキストの大部分を正確に再生することができた。語の置換は意味的に許容できるものが多く、意味を意識しながら音読できていることの表れとも言える。脱語についても、内容に大きく影響するものは少なかった。一方、下位群においては、内容と英文の構造が一致していなかったように思われる。単語認知、音韻符号化が瞬時にできることが音声化において必須条件であるが、その上に統語的知識がなければ内容を理解して情報を保持することができないと言っても過言ではない。下位群において、4回の音読を経ても再生できない部分が多かった事は、統語的知識に裏打ちされた内容理解がない状態で言語の内在化が難しいことを示唆している。チャンクを小さく区切っていくということは、学習者の持つ統語知識を活用可能な単位にしていく作業であり、熟達度の低い学習

者にとって助けとなると言える。チャンクごとにかたまりとして理解し、チャンクに慣れることが、処理の速度を増すことになる。また、チャンクの結び付きについては情報を追加していくという発想を持ち、前から順に処理できるようにならなければならない。

言語材料の内在化を促進するためには、あらかじめ句単位に区切ったチャンクごとの意味理解をしっかりとこない、即座に音声化できるように練習をしてから、テキスト全体の音読に進むべきである。

表1 カードA: 再生誤り

	上位群	下位群
1. Nowadays, 最近では		Nowadays→These days
2. robots help people in many ways. ロボットが多くの方法で人々を助けます。	in→for (2), robots <u>are</u> help (2), in×, robots <u>can</u>	people××, in→for, in <u>the</u> many ways, people~×, ALL×
3. For example, 例えば、		
4. robots are used to build cars ロボットは車を組み立てるのに使用されます	are→help, used×, are→is,	are×, to×, robots are×, build×, are→is, are used to×, are~×
5. and do work that is too dangerous for people. そして人々にとってあまりにも危険な作業をするためにも。	that is××, for people×, and do work that is too→can robots, do work that is too dangerous for people×	ALL××, do~×, that is~×, and do work that is too×, for people×, do work that is×, and do×, that is too×, do work that is too×,
6. Some robots can have conversations with people, 一部のロボットは人と会話ができます	have××, can××	ALL××××××, can have×, can→people, with people×
7. and this makes them good partners そして、このことが彼らを良きパートナーにしています	them××, this makes them→that is, this makes them good partners×	this makes them→them makes, and this makes them×, this makes them×, All××××
8. for children and even adults. 子どもや大人にとってさえも。	for××, and→or, even×	for××××, for→and, even×, ALL××
9. Robots are now playing a growing role ロボットは今や大きな役割を果たしている	are→is (2), 全部××, now×××, are×, playing a×	ALL××××××, are×, playing a×, are now×now playing a growing role→used to, a growing×
10. in people's everyday lives. 人々の日常生活の中で。	in→for, everyday×, in people's×, everyday→daily, in people's everyday×, people's×, everyday's	ALL××××××, in people's everyday×, in people's everyday lives→people in every day

×脱語, \_\_\_\_ 挿入語, Allすべて再生できない, ×の数・( )内の数字は誤りの数

表2 カードB：再生誤り

	上位群	下位群
1. These days, 今日では		
2. libraries offer 図書館が提供しています	All×, <u>many</u> libraries	libraries×, service offer libraries
3. many different kinds of services. 多くの異なるサービスを。	different×, kinds of× service on many service	of×, <u>the</u> service, many different kinds of×
4. One example is service その一例がサービスです	service×, is service×, <u>the</u> service	is service××, service×, One→This,
5. on the Internet. インターネット上の。		on→in, the×
6. With such online service, そのようなオンラインサービスで、	With×, With such→These, <u>internet</u> service	With such×××, such×, With×
7. people can find books 人々は本を見つけることができます		can×××, All××
8. without visiting libraries, 図書館を訪れることなく、		without×, visiting libraries→ libraries visiting, All ×, without visiting×
9. and so they can save time. そして、それにより彼らは時間を 節約することができます。	so×××, they→people, save <u>the</u> time, times	All××, so×, can×, save time →time save and so they can×
10. This service is being used このサービスは利用されています	is→are, being××, is being used ×,	is being×, is×, This service is being×, is being used×, being used×, All×
11. not only in Japan 日本だけでなく		All××, not only×, not only→no
12. but also in many countries 多くの国で	in××, many <u>different</u> countries, but also×	All××, in××, but also×, but also in××, also in×,
13. around the world 世界中の。		All×

#### 4 まとめ

本研究では、音読の効果的な方法をチャンクの大きさと熟達度の関係から考察することにより、学習者の熟達度に合った音読の効果的な指導が可能であることを示すことができた。また、情報を深く処理することが情報の保持において大切である。音声化される文章が自分自身の言葉であるかのように発声できるように、音読・暗唱する前に内容について理解を深めることが不可欠である。その上で、言葉と感情と身体が一体化するように(西本、2006)、リズムやイントネーションだけでなく身振り手振りを加えたり、視覚的情報と組み合わせることも効果的な音読につながる。今後の課題としては、本研究から得た効果的な音読指導を現場で実践し、保持された情報が「使える英語」として内在化されるように他の活動と組み合わせていくことである。

引用・参考文献

- Asano, T. (浅野敏朗) (1990) 「英文の暗唱について：効果的指導方法を求めて」『京都教育大学教育実践研究年報』第6号, 97-107.
- Celce-Murcia, M., Brinton, D. M., Goodwin, J. M. (1996). *Teaching Pronunciation: A reference for teachers of English to speakers of other languages*. Cambridge University Press.
- Ellis, N.C. (1996). Sequencing in SLA: Phonological memory, chunking, and points of order. *Studies in second language acquisition*(pp.91-126). Cambridge University Press.
- Gogakuyoiku kenkyusho (語学教育研究所) (1998) 『英語指導技術再検討』東京：大修館書店.
- Hatori, H. (羽鳥博愛) (1968) 「英語の授業 Procedure の検討」『東京学芸大学紀要』 19, 2, 76-81
- Hijikata, Y (土方裕子) (2004) 「日本人学習者の読み方とチャンキング単位の関係：速読と精読における効果的なチャンクの比較」『STEP Bulletin』16, 73-85.
- Kadota, S. (門田修平) (2006) 『第二言語理解の認知メカニズム：英語の書きことばの処理と音韻の役割』. 東京：くろしお出版
- Koyama, K., Matsuhata, K., & Tanabe, Y. (小山敬一・松畑熙一・田邊祐司) (1998) 「音読に関する実証研究(1)：介入音読と内容理解」『岡山大学教養学部研究集録』107, 97-103
- Nishimoto, Y. (西本有逸) (2006) 「ヴィゴツキーの分析単位の英語科教育への応用」『ヴィゴツキー学』第7巻, (pp35-41)
- Omi, M. (近江誠) (1984) 『オーラル・インタープリテーション入門』東京：大修館書店
- Osaka, N. (苧阪直行) (2000) 「ワーキングメモリと意識」苧阪直行(編)『脳とワーキングメモリ』(pp157-180) 京都：京都大学学術出版会.
- Schmitt, N. & Carter, R. (2004). Formulaic sequences in action: An introduction. In Schmitt, N. (Ed.), *Formulaic sequences: Acquisition, processing and use* (pp.1-22). John Benjamins Publishing Company.
- Takeuchi, O. (竹内理) (編著) (2000) 『認知的アプローチによる外国語教育』東京：松柏社.
- Tanaka, S. (田中茂範) (1997) 「断片連鎖と日常会話 チャンキング」鈴木佑治(編著)『コミュニケーションとしての英語教育論：英語教育パラダイム革命を目指して』東京：アルク.
- Tanaka, S., Sato, Y. & Abe, H. (田中茂範・佐藤芳明・阿部一) (2006) 『英語感覚が身につく実践的指導：コアとチャンクの活用法』東京：大修館書店.
- Tenma, M. (天満美智子) (1989). 『英文読解のストラテジー』東京：大修館書店.
- Toda, Y. (戸田行彦) (2008) 「タスクに基づく音読指導」外国語教育メディア学会関西支部中学高校授業研究部会／京都教育大学英語教え方研究会4月例会.
- Tsuchiya, S. & Hirono, T (土屋澄男・広野威志) (2000) 『新英語科教育法入門』東京：研究社.
- Tsuchiya, S (土屋澄男) (2004) 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』東京：研究社.
- Watanabe, H. (渡辺浩行) (1990) 「音読再考—黙読の速度化を促す音読指導の意義と在り方」『Leo』19, 101-130. 東京学芸大学大学院英語研究会.
- Wells, J. C. (2006). *English intonation: an introduction*. Cambridge University Press.
- Yanase, M. (柳瀬学) (2008) 「英文読解におけるチャンキング指導が日本人初級英語学習者にもたらす認知効果」『STEP BULLETIN』20, 137-143. 日本英語検定協会
- Yanase, Y. (柳瀬陽介) (1994) 『模倣の原理と外国語習得』. 広島修道大学研究叢書 第84号
- Yasugi, S (安木真一) (2001) 「フレーズ音読を中心にした授業の効果と問題点」『STEP BULLETIN』13, 84-93. 日本英語検定協会
- Yonekawa, A. (2008). Reading aloud and memory: Is any reading aloud effective for intake? 『英語教育・英語学習研究現場型リサーチと実践へのアプローチ』桐原書店.
- Card A : 2006年度第1回英語検定問題カードA, Card B : 2006年度第2回英語検定問題カードB